

喜怒哀楽



APRIL - MAY

4-5

Vol.85

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニュース

CONTENTS

笑顔礼讃西東

『季刊芙蓉』錦糸町教室 (神奈川県・鎌倉市) 2~3

笹川 薫 (新潟市・西蒲区) 4

詠み人スクランブル

《遠足の思い出を教えてください》10~11

新潟ぶらり／新潟市美術館 12

詠み人の「リレーエッセイ」 歌人 盛田志保子 16

2002年に創刊した「喜怒哀楽」も15巡目に突入。表紙は今号より「なつかしい遊び・玩具」シリーズをお楽しみください。

カラフルな色彩と手づくりのぬくもりを感じる紙風船。明治24年頃に登場し、今ではそのほとんどが新潟県出雲崎町で作られています。かるやかにふうわりと。春ですね。

温古知新 39

「菜根譚」11

欲望に負けず平常心でいる事が大切と説いた前回。今回は41項からお届けします。

念頭濃かなる者は、自から待つことに厚く、人を待つこともまた厚く、処々皆濃かなり。念頭淡き者は、自から待つこと薄く、人を待つこともまた薄く、事々皆淡し。故に君子は居常の嗜好は、太しく濃艶なるべからず、亦宜しく太しく枯寂なるべからず。

(心が細やかな人は、自分にも他人にも、全てにおいて細やかである。これに対して、大雑把な人は、自分にも他人にも、全てにおいて大雑把だ。ゆえに、上に立つ者は、細かすぎても大雑把過ぎても良くない。)

細かすぎず大雑把過ぎず。常に良い加減でいる事が大事と言うことですね。

彼は富なれば我は仁、彼は爵なれば我は義。君子固より君相に牢籠せられず。人定まれば天に勝ち、志一なれば気を動かす。君子亦造物の陶鑄を受けず。

(彼が富んでいるならば自分は人格で、彼が名誉で勝るならば自分は正義で対抗する。正しく人の上に立つ者は、元来、財力や名誉には取り込まれないものだ。心が安定すれば、自然現象にも勝り、人の志を集めれば、天の気すら動く。正しく人の上に立つ者は、元来、鑄物や焼き物の型

にははまらないものである。)

物の豊かさや名誉より、人格者であることや儀を重んじること。心の豊かさを大事にしていきたいものです。

風恬らかに浪静かなる中、人生の真境を見、味淡く声希かなる処に、心体の本然を識る。

(風も波も静かな状態でこそ、人生の真実を見ることができ、贅沢をせず物静かな声を聞くことができる。)

喧騒に惑わされず、心静かにさまざまなことを見守ることができれば、物事はうまくいくのでしよう。

身を立つるに一步を高くして立たずんば、塵裡に衣を振り、泥中に足を濯うが如し。如何ぞ超達せん。世に処るに、一步を退いて処らざんば、飛蛾の燭に投じ、羝羊の藩に触るるが如し。如何ぞ安楽ならん。

(出世しようとするなら、他人より一步下がっていないと埃の中で服を振るい泥水で足を洗うようなもので目的は果たせない。生きてゆく上で、他人より一步下がっていないと蛾が蠟燭の火に飛び込み、羊が垣根に頭を突っ込んでしまうようなもので、安心して暮らして行けない。)

大きな目で見て、目的を達するためのリスクを回避することが大事、ということでしょうか。

中庸を重んじ、富や名声に惑わされず、喧騒から離れて物事を見る。そして、目の前に囚われず大きな視点で物事を見る。上に立つものとして、心しておきたいものです。(古川久美子)

『季刊芙蓉』

錦糸町教室

代表 照屋眞理子様

(神奈川県・鎌倉市)

3月11日(金)、東京・錦糸町の駅ビル内にある「読売文化センター」で行われた「季刊芙蓉」の錦糸町教室にお邪魔しました。「季刊芙蓉」は平成元年に須川洋子さんが創刊。現在は照屋眞理子さんが代表を継ぎ、4カ所指導にあたっている。



▲明快な切れのある言葉で適切な指導をされる照屋眞理子さん

教室のドアを開ける照屋さんに視線を移すと、なんと杖をついていらっしやる。数日前に脇腹の肉離れを発症したとのこと。「痛くて食べられなかったけど、辛い口だけは達者なので」と、痛みを押してお越しくださる。また、冬の間、天候の関係でなかなか参加できなかったという88歳の野村さんも杖をつきつつ元気に出席。いつも通り句会が始まった。本日の兼題は「春風」、4句提出の5句選。清記、選句、披露のあと、一番の高得点句を講評し、あとは順

番に点の入った句の講評に続く。

桃の花ほつたらかしの

二男坊 幸雄

桃の花は女の子の節句。「ほつたらかし」がどうだろう? と思った

が、桃の花と男の子の取り合わせがおもしろい。

照屋: 主人が3人兄弟の二男。ほつたらかされて育った人だなとわかる(笑)。桃の花という何ともいえないほつとしたものを組み合わせ、二男坊に目を向けている作者の視線が好き。二男坊の作者はどなた?

作者: はい、私です。六男坊ですが(笑)。明日は喰はるるあはれをチリと蛭鳴く

蛭が鳴くかどうかはわからないが、明日の味噌汁には食べられる、蛭の命のあわれを詠んだところがいい/それを句またがりて上手につくられた。

眞理子

照屋: これは上五が字余りなだけで、別段句またがりではない。電気を落とすして寝ようとしたときに、砂をはく蛭がチリと動く音が聞こえた。

春めくや介護のかなめ心技体 幸雄
介護には大変な力があるので、心技体がいいと思った。

照屋: 「介護のかなめ心技体」がキャッチフレーズみたい。「心技体」がするつと入るとその分すべる。あちこちで使われている言葉なので、もつと作者本人から湧き出る言葉を使いたい。



▲最年長者 88歳の野村さん(左)と今日の司会、黒一点の小林さん

道玄坂に多きスカジャン 春風来 マサエ

若者の街、渋谷。暖かくなりスカジャンを着

た若者たちが、道玄坂にあふれてくる様子が感じられる/スカジャン? スカジャンじゃない? ス

カジャンは横須賀発祥のキンキラしたサテンのジャンパーのこと。

作者: スタジャンになおさせていただきます(笑)。

鷹鳩と化す香煙の慰霊堂* 千枝子

「鷹鳩と化す」という季語は初めてだが、東京大空襲に対する作者の思いが伝わるような気がした/ちようど昨日

父に頼まれて慰霊堂に行った。名簿は閲覧できるが内部には3月10日と9月1日の大法要の時しか中に入れない。

照屋: 「鷹鳩と化す」は七十二候の一つで、陽気がよくて、鷹のような獐猛な鳥も鳩のように優しくなるという意味

から3月16日~20日頃のこと。季語をかえた方がいい。

作者: 御参りに行ったときも鳩がいてばいた。鳩は平和の象徴。昨日は寒かったが、暖かくなると、鳩は鷹にな

ることを忘れてこんなふうにしたむろしているのかなど。

東京都慰霊堂: 墨田区横網町公園内にある慰霊施設。関東大震災の身元不明者の霊を祀る震災記念堂として創建。のちに東京大空襲の身元不明者の霊を合祀して1951年現在の姿に。

春風や転居通知の二三通 幸雄

ありふれた光景だが、春らしくていい。

照屋: 二三通という具体的な数ではなく、ちらほらと、くらいでいい。情報の量はなるべく少なく漠然とさせた方が、読者が想像を働かせることが出来る。

菜の花や「魁夷の道」をゆく如し 寿枝
東山魁夷の絵が大好き。菜の花に春の喜びを感じる作者の気持ち伝わってくる。

照屋: 「」は何? かきかっこをつける何かあるのかなと思ってしまう。

作者: 菜の花の風景が、魁夷の「道」の絵と同じような感じだった。

法隆寺 恵美子

青丹よし西円堂の春の鐘

照屋: 本当になにも言っていないが、ただ春の鐘に落ち着く静かさがいい。「青丹よし」があれば奈良だとわかるので、前書きの法隆寺はいらない。枕詞をうまく使うと余計な言葉を使わなくてすむ。

帆船の柄のスカート風光る まり子

颯爽とした感じと風光るがいい。

照屋: なびいているスカートが目に見えるような、春らしいいい句。ただ、それ以上ものすごくいいというわけではないけど(笑)。

春風と買ひにゆきたる今月号 史之

うきうきとした雰囲気が出ています。

照屋: だらだらとつながって切れがない。なぜか。「買ひにゆきたる」と連体形になつているから。「春風を連れ買ひにゆく今月号」でいい。実際そういう気分になつたから「春風と」と言ったの

だと思いが、事実はどうでもいい。形がいい方が俳句。

龍天に昇りゆく光かすみれ色 眞理子

光を「かげ」と読み、すみれ色。勇ましきの中に優しさもあつていただいた「かげ」と読ませたテクニクがよく、春のまばゆい光を感じた。

照屋：「すみれ色」が出てきたときはうれしかった。

受験子の首尾は弾んだ足取りに 千与子

今日の試験はよくできた。それが弾んだ足取りによく出ている。

照屋：首尾はいらない。

作者：先生にダメだつて言われると思つた！（笑）

子の巣立ち親にも親の一步かな 恵美子

照屋：理屈っぽい、子が育つていくときに親も一緒に成長している。

作者：娘と離れて暮らして何十年。先日、行ってきたが気持ちのギャップの表しようがなく、親も少しずつ前に進まないといけないと感じた。

くわうこつと春の風食む麒麟かな

千枝子

春の風食む、とはなかなか言えない。こんな風に読めたらいいな。

照屋：前にも言ったが、漢語は使わないこと。「こうこつ」と、ひらがなに

しても漢語。そういう時は漢字で「恍惚」と書き「うっとり」とかなをふる。それで目から入ってくる情報と、耳から入ってくる情報がきれいに落ち着く。

辞書のなかで市民権を得ているかどうか

かは関係ない。辞書に載っている言葉は体制側の言葉。詩の言葉はアウトローでいい。そして、読み手は自分の基準に合わせて句を読むのではなく、この句はどう読まれたがついているか、句の方に自分が近づけば読める。

連合ひと老いの道草水温む 幸雄

「老い」が気になったが、いい夫婦の光景だなとひかれた。

照屋：人生の道草を味わえるなんてあの年代になつてから。いいと思う。

ふるさとに忘れものあり春の雲 史之

忘れ物ということはその人にとって必要かつ大切なもの。それが春の雲と響いている。

照屋：ふるさとじゃないところにあればいいのに。「青空に忘れ物あり」として季語を違うものにするとか。ふるさとだと、ごく当たり前の発想で歌謡曲の一節になる。詩はもっと自由なもので日常的な連想、発想とは次元が違う。作者は今、句会に出られず指標もないままに作っているかもしれないが、そんなと

きはいつ

たん作る

のをやめ、

いい句だけ

をたくさん読む

といい。

そしてその句がどう

いう構成

成で自分



はどこに魅かれたか、句に對する分析を徹底的にやってみる。もう一つは模倣。飽きるまで真似をすると飽きたあとに自分のものがでてくる。「春風」と言ったらパツと思ひ浮かぶイメージがあるわけで、それを自分の中でどう新しくつくりあげるかということ。まず個性なんて考えない。こねくり回して変なものをつくるより、言葉にそつて素直につくる。やっぱり基礎練習。それがないと、よほどの天才以外、先にはいかない。

■ほかの句
鶯の鳴音届くや雨あがる

俳句はこういうもの、という平均値でつくつた感じ。これでは誰の句であつてもよいことになる。この句では「や」があつても切れていない。鶯と出したら

鳴音なんていらぬ。

春風やスマホに道を教へられ

これも何度も言ったが、連用形で止めるのは川柳の文体。「教へられ」または「春風やスマホに道を聞いてみる」。

防災のグッズに加へる春の色

「加へる春の色」がいいが、防災のグッズが日常語。そういうものを準備しながらも、春は春らしい色のもが入る、それを詩として表現出来るといい。

春雨や入江奥まる貯木場

照屋：奥まったはあるが、奥まるはやや苦しい。春雨と貯木場の情景はいいので中七を工夫して。

作者：奥まるはおかしいと思いつつ、入江の奥のといつたらこれもまた…

照屋：入江の奥に貯木場があるという

事実を見てしまうとそうなるが、見た

ものはいったん忘れてください。一度忘れて、その時に自分の中で一番大切なのは何かということだけを見て行けば、入江の奥とか、そんなことは関係ない。

★「俳句は紙と鉛筆があれば誰でも作れます」というフレーズに騙された」、「いつの間にか抜き差しならないこと

に」…などの感想も聞かれた「はじめの俳句」教室。近づいたと思うと、またはるか遠くに飛ばされるといふジレンマに陥りながらも、一様に「俳句を

始めると絶対に字は読めるようになる」

「草花の名前も覚える」というメリットも口にされる。そして「少しでもやつた！ とにんまりできる句が作れたらいい」と充実顔。

スタートをきる春。短歌も俳句も、そしてシャンソンも歌うマルチな指導者が、大きな瞳と懐で迎えてくださいます。はじめてみませんか、新しいこと。

（木戸敦子）



▲第2、第4金曜日、月2回開催の「はじめての俳句」教室

笹川 薫様

(新潟市・西蒲区)

『弥彦・角田山系の樹木』

本年1月、4年以上かけて共著で「弥彦・角田山系の樹木」をまとめた笹川薫さんにお話をお聞きしました。

Q 小さい頃から植物に興味が？

うちは農家だったので、よく田んぼの手伝いをさせられたが、自分で栽培した最初の記憶はサボテン。小遣いを出して祭りで買ったサボテンを、川原からちよūdい大きい石や砂を拾って用土とし、育てていた。自然と農業高校に進学したが、卒業時はちよūd減反政策が始まった頃。実務ではなく教える方、農業高校に勤務した。以来、転勤の時以外はずっと角田山の麓に住んでいる。あの辺りの小中学校の校歌は必ずといっていいほど角田・弥彦山が出てくるし、春・秋の遠足もみな角田山。山に行つて栗や蓮の種を食べ



▲「ヒロハヘビノボラズの名は、鋭いトゲがあり蛇も登れないことによります。でも黄色い小さな花でかわいいんです。大好きです」と現在は新潟市食育・教育センター園芸相談員の笹川さん

たりと、そんな環境だったから角田・弥彦山のことはよくわかる。白雲木は、弥彦山のテレビ塔のあたりに5〜6本あるとかね。

Q 角田・弥彦山のストーカーみたいですね(笑)

弥彦・角田山系は、植物層がぶつかるころなので、植物の種類が豊富でどの季節も楽しめる。そんなこともあって、30代のころ知り合いが立ち上げた「弥彦山脈植物友の会」に入り、それまで以上に植物の名前を覚えるようになった。様々な植物を観察したり、写真を撮ったりしては、植物名を調べた。知らない、見たこともない植物があると、ぜひ知りたいという気持ち湧いてくる。

Q それが高じて今回の本を？

退職したら角田山の植物をまとめようと思っていたが、巻農業高校勤務の時に一緒に働いていた長島義介先生、荒川昭夫先生に「植物の本は多くあるが、木に特化した本はない。一緒にどう？」と声をかけていただき、あとはとんとん拍子で話が進んだ。

Q でも完成に4年近くかかった

それぞれの木の全体(葉)、花、実の写真を網羅しようとして自分たちで写真を撮り始めたが、花が撮れなかったり、実が撮れなかったり1年延長になった。平らなところに木が一本立っているわけではないので、撮影に思った以上に苦心した。高いところにある、上に葉が重なりその下に咲く木の花がかな

か撮れず4、5回通つて撮ったことも。雨が降った日は、何の木の花が足りない等、写真の整理に充てた。毎週、私の休みの日に合わせて3人で車に乗り、撮影が終わるとランチをするというパターンで、あの3人はいったい何者なんだ？と思われていたかも(笑)。1年に40回行ったとしても、3年で1000回は通つたと思う。

本の掲載に関しては、開花順を基本に、アカシデとイヌシデ、キタコブシとタムシバ等の似たような植物を比較できるように収録した。小学生でも読めるようルビをふり、葉の説明として対生は「枝に対して向かいあつてつき(対生)」に、互生は「枝に対して互い合いにつき(互生)」として、極力専門用語の使用は避けた。また、漢字で書くのが覚えやすいという声も聞いたので「接骨木」「木五倍子」の漢字表記も加えた。

Q 評判はいかがですか？

山に登る方はもちろん、登らない方も子どもに見せたいとか、これがそうなのか！等、「樹木の次は山野草の本がほしい」と評判がいい。よく家を空けるので、家人の評判はよくないが、男はロマン、女は不満でしょうか(笑)。山野草の種類は樹木の倍から4倍はあるので、死ぬまでにまとめられるかどうかわからないが、構想を練りつつもう撮影を始めている。

★相手を知りたいという気持ちは愛。植物への愛を皮切りに、それを知りたいという読者への愛と配慮が詰まった本書。3月27日、実際に笹川さんにご案

内いただき、良寛さん縁の山、国上山に登った。常にニコニコ笑みをたたえ、懇切丁寧に説明くださり、私たち女性陣のたわいもないおしゃべりに時に声をたてて笑い、お優しいことこの上ない。この本のため、なかなかできなかったというもう一つの趣味はクロダイ釣り。どうしても50cmオーバーを釣りたいが現在48cmどまりとか。その2cmに何の意味があるのかはわからないが、ロマンを求めて山野草の本の完成と50cmの釣果、陰ながら応援しています。(木戸敦子)



弥彦・角田山系の樹木212種を掲載した、この地を登る際には必携の書





投稿作品

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。なお、今回の投稿者数は、223名でした。

※しめきり2016年5月16日(月)まで
※作品は原稿どおりに掲載しております。

川柳

- 1 定位位置にアハハと笑う妻がいる
木村洋一(新潟県)
- 2 願いごと五円玉では多過ぎる
石原岳(群馬県)
- 3 豆で打つ我が夫ならば愛と知れ
関本守(新潟県)
- 4 幸せは健康維持だと思ふ老い
守屋高雄(岩手県)
- 5 花よりも稲荷のりまき母の味
細川光子(栃木県)
- 6 脱いだ足袋外反母趾のそのまんま
山口千鶴子(東京都)
- 7 黒川の柿の花咲く筆の村
五十嵐陸博(新潟県)
- 8 時流れ玉砕の島観光地
藤沢健二(千葉県)
- 9 節分をせっぷんと読む孫娘
橋本世紀男(東京都)

- 10 四季めぐる母の思い出詩にする
渡部美代子(山形県)
- 11 財政改革の重力波欲しい
原崇雄(埼玉県)
- 12 ニッポンをひとつひとつ消すダンブ
高柳閑雲(愛知県)
- 13 生きる道冬眠させてくれぬ風
小山惠美子(大阪府)
- 14 美人の湯すつびん隠す湯気が舞う
和崎治人(山口県)
- 15 いつまでも元気な体幸せです
松田義登(福岡県)
- 16 猫に何つて炬燵を片付ける
丸山芳夫(東京都)
- 17 拝啓も敬具もなくて落着かぬ
小石澤英夫(東京都)
- 18 叱られた貧乏揺すり今器具が
佐伯セツ子(香川県)
- 19 体脂肪すつかり使い春支度
鈴木義雄(福島県)
- 20 菜の花に誘われ蝶の無言劇
久本にい地(岡山県)
- 21 千の風天寿全う母の声
大久保アヤ子(東京都)
- 22 ありがたくないう子備軍にさせられ
目黒豊光(福島県)
- 23 梅までも思いのままと自己主張
奥那於子(大阪府)
- 24 知つていて知らぬふりするイヤリン
グ 山崎一嘉(愛媛県)
- 25 心配で豚も泣いてるTPP
福地義雄(沖縄県)
- 26 八十路でも畑で汗かく幸せかも
西山知子(岡山県)

俳句

- 27 傘寿まで生きて悔いなき残り福
有坂馨園(福島県)
- 28 散りぎわの贅を尽せし花衣
内河邦久(東京都)
- 29 自動ドア閉まらぬうちに鬼遣らひ
天野輝子(東京都)
- 30 ラグビーの歓喜のボール高々と
川口襄(埼玉県)
- 31 遣されて主婦もやります冷奴
山崎吉晴(群馬県)
- 32 産まぬ自由嫁がぬ自由春うらら
早乙女文子(埼玉県)
- 33 五線紙をとびだす春の嵐かな
大塚徳子(埼玉県)
- 34 浮世絵の巷さ迷ふ四温かな
大谷茂(埼玉県)
- 35 教会のスタンドグラス寒明ける
竹本美美子(新潟県)
- 36 立春や舷灯揺らぐ隅田川
古谷力(東京都)
- 37 待ち焦がれ夜明けを告げる露の臺
西條公雄(埼玉県)
- 38 アイリスの色競ひ合ふ花屋かな
緑川禎男(埼玉県)
- 39 街頭にゆるキャラ立ちて春日和
中島光江(埼玉県)
- 40 天から地へゆらすオーロラ櫛の鈴
上村元義(神奈川県)
- 41 より高く二人寄り添う八十路坂
花塚三郎(千葉県)
- 42 千の耳春の声聞く羅漢さま
堅田秀子(東京都)

- 43 終活は如何にあるべき桜かな
佐野和彦(静岡県)
- 44 湯の町に賑わい戻り春の富士
松尾らん(東京都)
- 45 父の忌は七十余年豆撒く日
林 克(福島県)
- 46 寒の月鼻腔大きな鬼瓦
津田忠彦(岡山県)
- 47 春シヨール風に預けて街の中
小林七重(新潟県)
- 48 春耕のしをへる畝へ番鳥
本庄準也(埼玉県)
- 49 囀や富士の重さを見霧かす
渡邊碧海(静岡県)
- 50 山笑ふ昭和一桁生き残り
佐野繁(静岡県)
- 51 湯どうふや湯気の向こうに春をまつ
杉村美保子(岩手県)
- 52 吊り雛を見上げる瞳孫娘
中村和弘(愛知県)
- 53 寺の猫みそ屋の猫と恋の仲
吉里ひとみ(東京都)
- 54 さくらころ湊町ゆくわれもさび
安部哲(新潟県)
- 55 初観音線香一本たむけけり
津田吾燈人(高知県)



- 56 しゃぼん玉堪へに耐へ憂す雨情かな
福岡悟(東京都)
- 57 いぬふぐり円空仏を照らす燈よ
白戸麻奈(東京都)
- 58 笑む曾孫撮るや家族の春迎ふ
神一男(静岡県)
- 59 初場所や琴奨菊の電車道
井上静夫(栃木県)
- 60 寒の月耐える裸木あり癌告知
木村舩(山形県)
- 61 投入堂若葉の風に浮き沈み
田中昶(鳥取県)
- 62 着ぶくれて古着のままの妻がいる
浦橋渴雪(兵庫県)
- 63 お飾を下ろして普段の顔になる
湯浅芳郎(岡山県)
- 64 眠る間に吹いて了ひぬ春一番
大阿久雅子(埼玉県)
- 65 蟠ゆらり四温日和の丸木橋
寺内佶(埼玉県)
- 66 七草や足どり軽き寒稽古
森俊彦(神奈川県)
- 67 蒨葎草我にもほしき力瘤
村山徳英(埼玉県)
- 68 船頭の佳き歌声や炬燵舟
宮宅芳子(岡山県)
- 69 席入りの待つ間に淑気漂へる
杉江典子(岩手県)
- 70 早梅の一本凜と父母の寺
中嶋清子(佐賀県)
- 71 柔やかに父母の遺影や梅一樹
岩村昇(神奈川県)
- 72 青天や吾れの身案す実南天
柳澤京子(宮城県)
- 73 寝返ればかすかな寢息おぼる月
小泉和明(茨城県)
- 74 寒のあけ温めし水を梅鉢へ
磯部力(新潟県)
- 75 下萌の野径歩むも至福なり
道給一恵(埼玉県)
- 76 雛壇にでんと居並ぶぬいぐるみ
長峰正晴(千葉県)
- 77 梅が香や過ぎたる時を偲びぬし
青木ケン子(埼玉県)
- 78 どこ見ても皆懐かしき春景色
田野井一夫(栃木県)
- 79 「靴の脱げし子」や大賞受賞の初便り
田野倉訓郎(東京都)
- 80 寒晴れて強き産声男子なる
黒田康子(大阪府)
- 81 福助の燐寸が語る彼岸かな
椋本望生(大阪府)
- 82 窓口は水仙の香や切手買ふ
金子よし子(新潟県)
- 83 雨あとの閑けさにあり落椿
小澤円梨(静岡県)
- 84 摘み草や遠きを手繰る母の指
中田文子(大阪府)
- 85 光降り野原に遊ぶ春疾風
佐々木素風(新潟県)
- 86 一椀の粕汁にみる時代かな
小島岳青(新潟県)
- 87 ライト浴び眼四つの恋の猫
阿部幸子(宮城県)
- 88 白梅の一花ほころび南向き
菅原茂子(宮城県)
- 89 ヴァイオリン聴き祝ひ受くシクラメン
杉原明子(静岡県)
- 90 如月のきらきら流る瀬音かな
吉村充治(埼玉県)
- 91 春一番翁のすくむ魔天街
藤井春三(埼玉県)
- 92 信号は僕が押さねば紅山茶花
居原田連星(大阪府)
- 93 遠目にも知的な女性春コート
二瓶邦枝(埼玉県)
- 94 着膨れて懐奥の宝くじ
倉田淑子(東京都)
- 95 風神のたたら踏みをり春一番
羽根田明(神奈川県)
- 96 星冴ゆて残光の中放ちけり
山本理香(大阪府)
- 97 轉や土手を駆けゆくランドセル
一瀬正子(埼玉県)
- 98 雪椿記憶の底の紅深し
川嶋法子(東京都)
- 99 街を行く人皆猫背雪催
岩田信(神奈川県)
- 100 愛求め今が盛りの猫の春
大橋絵代(千葉県)
- 101 日の匂い温みも入れて大根漬
岡村君枝(茨城県)
- 102 春雪やまだ降るのかと縁の内
鈴木みえ(長野県)
- 103 夢は何帰りし子らの布団干す
菅原キイ子(宮城県)
- 104 白鳥と鴨の群れる水辺世界平和
白松いちろう(千葉県)
- 105 友が越しむなしき席の春時雨
古川正栄(千葉県)
- 106 陽炎や曾孫の笑顔まだ六月
大橋恒次(新潟県)
- 107 草萌ゆる弓道一筋まごむすめ
池田岬(埼玉県)
- 108 空からの又空からの雪が降る
湯浅暉子(石川県)
- 109 談笑の家族の団居実千両
邑橋節夫(兵庫県)
- 110 ブラックで政職下りる冬の雨
中山日出子(大阪府)
- 111 春立つと水をふくめばむせやすし
松嶋光秋(東京都)
- 112 初蝶のよちよち回る花時計
松前邦広(千葉県)
- 113 泥葱の束幅利かす勝手口
今井勝子(新潟県)
- 114 梅林の薫ほのかに野風出て
駒場京子(神奈川県)
- 115 なつかしき人がくるよな雪明り
小林春雪(新潟県)
- 116 窓に日の激しき焰シクラメン
高杉杜詩花(北海道)
- 117 息で押すナースコールや窓に雪
金子範子(高知県)
- 118 犬吠ゆる山家の庭や木守柿
津布久信雄(東京都)
- 119 手をつなぐ子等を見ているふきのと
う
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 120 砥部町の夕映え色の蜜柑着く
井上氣海(広島県)
- 121 注連飾り俳句の如き吾が心
仁藤ひろし(埼玉県)



- 122 虫達よ隠れておくれ新茶摘む
中野勝子(鹿児島県)
- 123 あと二年金婚記す初日記
中村康浩(福岡県)
- 124 寒空の満月うつし池の面
長谷部喜代子(大阪府)
- 125 囲碁を打つ卒寿と傘寿四方の春
山岸伊久雄(東京都)
- 126 友の忌や八つとなれかし寒北斗
増本和子(大阪府)
- 127 終着の見えぬ鉄路やつくし摘む
高垣勝代(大阪府)
- 128 煌々とライトつきゐる寒さかな
山崎紀久江(福岡県)
- 129 初空や未知の米寿に帆を上げて
大窪美代子(大阪府)
- 130 日本海岩に数多の海苔搔女
青木涼子(埼玉県)
- 131 満開のミモザの丈に巡る過去
針生清(千葉県)
- 132 汚染地のまだ残れをり草青む
菅井文男(新潟県)
- 133 笹舟の思はぬ速さ鳥雲に
鈴木清子(埼玉県)
- 134 励ましの師より電話や春の風邪
岡野智恵子(埼玉県)
- 135 おだやかな余生を祈る初御空
柴田恵美子(北海道)
- 136 ふつと来る沈丁の風いずこより
中澤寿美(神奈川県)
- 137 せせらぎに日の射し葦の若葉かな
増田公代(東京都)
- 138 海向かふ坂道の先風光る
中川義彦(新潟県)

- 139 七草の七つの福を妻と食む
本間進(新潟県)
- 140 孫の名をまちがふ電話初笑ひ
本間ミネ(新潟県)
- 141 手にのこるトマトの匂ひちちの故郷
浅野信廣(宮城県)
- 142 わたる逝きたか子も在らず二月尽
小山羊子(新潟県)
- 143 黄昏の川面ただよふゴム風船
石井美智子(埼玉県)
- 144 菜の花や道也も越後井月も
有田俊一(埼玉県)
- 145 非常時のリュックに埃更衣
大矢知順子(神奈川県)
- 146 指先の春にかまけて水仕事
大内泰子(東京都)
- 147 春霞はるかに連なる生駒山
沖惇子(大阪府)
- 148 微睡の中の初音のきこちなく
石川郁子(埼玉県)
- 149 一病に大安もなし夏に入る
宇田川正雄(埼玉県)
- 150 墓売りの電話口にて苦笑ひ何でわ
たしの歳を知ってる
松田重信(埼玉県)
- 151 寺参り無邪気にはしゃぐ園児たち
祖の神々が見守る子らを
坂元正憲(東京都)

短歌



- 152 富士山のいつもと違う姿見る雪が重なりどんと前に
大鳥居牧子(東京都)
- 153 木々の芽の漲る命輝かせ雨は雫となりて滴る
桑原謙一(群馬県)
- 154 落雷のために遅れて来し電車げに美しき水滴こぼす
北岡晃(兵庫県)
- 155 息のやかたうからそろひて新玉のとそや雑煮にくははる幸せ
高須孝(愛知県)
- 156 被災地にとほる街灯与えたり夢と希望と生きる力を
阿部澄江(宮城県)
- 157 八十路とて白寿の道は遠からむたずさへ歩む貧者の一灯
阿部徳夫(宮城県)
- 158 枯草の細き流れの下田川お吉ヶ淵は今は鎮もりて
土屋喜雄(山梨県)
- 159 おぼろげな満月透ける三日月の浮かぶ冬空ぼんやり眺むる
若月理依子(新潟県)
- 160 今朝の雨春雨でしようかやさしくて両手に受けて唇つけてみる
寒川靖子(香川県)
- 161 義家の駒つなぎの桜と伝へきく古木にあまた神籤むすばる
山田良男(埼玉県)
- 162 うつくしまと美称ほこれる福島の風評になき五年すぎたり
黒澤正行(福島県)
- 163 花火鳴り東京マラソン紙吹雪銀座浅草有明ゴール
新井賢(埼玉県)

- 164 ありがとうの優しい声に癒される卒寿の人のお世話楽しき
関原幸子(東京都)
- 165 黄泉の国親しき人が多くなり困らんの顔また夢枕
北澤実夫(東京都)
- 166 昭和史と共に朽ちゆく兵なれば自省の国を目にして死なむ
早坂絃司(北海道)
- 167 雪晴れて洗濯物の干されたり陽もたのしげに遊ぶが如し
高橋登志子(新潟県)
- 168 わが娘細かき事に氣遣ひて呉れるが嬉しわれは独り居
小暮昭司(群馬県)
- 169 経緯度に「三」が十二個並びたるわが地は「地球三十三番地」
西山悌三郎(高知県)
- 170 亡き母の語る歴史の転換点あの雪の血の二・二六事件
合田浩子(茨城県)
- 171 白梅や気品ただよう香よし凛々しく輝け深空にとどけ
五味田幸夫(神奈川県)
- 172 ひっそりと独りで逝きし友しのぶいつかはわが身春のおぼろに
岩崎令子(大阪府)
- 173 轟音を残しH2A名は「ひとみ」種子島の空へ点となる
濱崎祥子(鹿児島県)
- 174 初うまに買ひもとめたる福あめをデイの友にわかちあげる
林玉子(長野県)

フォトイック



こちらの写真を見て
詠んでいただきました。

(写真提供：中川肇さん)

- 175 ふらここに乗る人もなし過疎の村
水落重武(新潟県)
- 176 躍動の離る公園夕心地
宇都木安子(東京都)
- 177 ぶらんこの窪みに生れしボールかな
阿部至(埼玉県)
- 178 毬蹴つて宇宙へ届け半仙戯
井原毬子(東京都)
- 179 復興の町も少子化苑臚
片山茂子(埼玉県)
- 180 毬ひとつ抱くふらここの窪は妣
鈴木岑夫(千葉県)
- 181 ブランコよさみしく向う岸をみる
浅海和代(東京都)

- 182 又あした三三五や鳥帰る
三津木俊幸(千葉県)
- 183 置き去りのあそびば寂し秋の暮
千代田栄次(東京都)
- 184 ふらここやボール蹴りして釣りもし
て
富樫和子(山形県)
- 185 寒明や一つのボールが子等を待ち
黒岩正子(埼玉県)
- 186 ふらここの蹴り落したる一番星
清まさじ(静岡県)
- 187 にぎわいを見送りホッと一と休み
吉田加代子(新潟県)
- 188 幸せのときは短かし半仙戯
高崎登喜子(東京都)
- 189 押し寄せる波また波やふらここの
近藤薫也(千葉県)
- 190 ふらここのりたきボール弾みをり
堀田寿美子(北海道)
- 191 たまに又塗装してねとぶらんこが
濱田イサオ(福岡県)
- 192 歯舞に取り残された人が居る
益永克之(福岡県)
- 193 ぶらんこにも子どもがいない遊園地
岩崎政弘(岡山県)
- 194 春の海胸に刻みしてんでんこ
井田由利子(宮城県)
- 195 ふらここに乗れば宇宙へ行けますか
鈴木蝶次(宮城県)
- 196 ふらここを揺らしてみたい里の景
田中豊恵(新潟県)
- 197 ふらここや海にも空にも行つてみる
有田裕子(北海道)
- 198 嬉しいねブランコだけは年取らず
青木日出男(群馬県)
- 199 誰も居ぬふらここ淋し景色かな
重原昇(新潟県)
- 200 ゆれ止めてふれた手のひら淡い恋
植松與悦(山形県)

- 201 ブランコで孫と一緒に宇宙たび
森恒雄(愛知県)
- 202 ふらここや足元の穴今昔
星一子(神奈川県)
- 203 漕ぎ出して未知の世界を覗たくな
り
長谷川庄二郎(千葉県)
- 204 海へ漕ぐぶらんこ春を蹴りあげて
梶鴻風(北海道)
- 205 すぐそこに声ある丘の半仙戯
倉沢ひとみ(静岡県)
- 206 遠い日にゆれた想いがほろ苦い
高松秋良(群馬県)
- 207 ふらここやボール安住大地蹴る
北野耕兵(千葉県)
- 208 神の手のふらここ揺する昼さがり
齊藤安弘(神奈川県)
- 209 五年経ち城跡公園児が見えず
近藤富夫(東京都)
- 210 春の海かなしみ消せぬ五年間
安木沢修風(新潟県)
- 211 今しがたブランコ降りたの私なの
萬濃その子(神奈川県)
- 212 ブランコは誰も居なけりや振向もせ
ず
鏡たか子(山形県)
- 213 ふらここを湖に向つて漕ぎたけれ
光成高志(千葉県)
- 214 ふらここや一人はみ出す虚空かな
有島和子(東京都)
- 215 少子化やブランコだけが風に揺れ
山中たい子(大阪府)
- 216 ブランコのきしむ音して二人の背
林恵子(大阪府)
- 217 海山の遠景望めりブランコや
油谷博子(兵庫県)
- 218 ふらここや横顔へ愛打ち明ける
杉浦俊雄(静岡県)
- 219 子等遊び跡の閑かさ冬隣
関 誠(新潟県)

俳句・川柳募集!!



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

右の写真から、自由にイメージし17文字(俳句か川柳)で表現してください。1枚の写真から想起される世界は無限大です。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。ユニークなイック(一句)をお待ちしております!

●●●お詫びとお知らせ

「俳句とフォトイックに投稿したが、フォトイックしか掲載されていない。投稿作品数からみても両方掲載してもよいのでは」とのお声をいただきました。

現在お一人1作品の掲載ですが、次回より投稿作品数に応じてフォトイックのほかに、俳句・短歌・川柳の作品も掲載予定です。

(投稿作品数が多い場合は、いずれか1作品の掲載とします。)



2月号の 心に残った作品

※より多くの作品を掲載したいと考え、大賞と、自句自解コーナーは年一回とさせていただきます。

◎俳句部門大賞

58 目の話藤の話や日向ぼ

一瀬正子(埼玉県)

・この歳になると目と膝と。菌も葉もあるある話です 本庄準也(埼玉県)
・思わず「そうそう」と共感してしまいました。暗さが無くて良いと思いましたが 大阿久雅子(埼玉県)・年配者の日向ぼこでそれぞれの体調を話し合っている。一病息災の雰囲気はどこか微笑ましい 邑橋節夫(兵庫県) など

63 お年玉いたゞくまでの孫正座

大久保アヤ子(東京都)

・孫の表情が正座の姿にすべてが伺えるお正月のあたたかい瞬間です 三津木俊幸(千葉県)・「ただく正座」日本の美しい言葉、立居振舞、お孫さんの世代へ伝えていって欲しいと思います 中山日出子(大阪府)・お手玉を貰う迄はとやんちゃな子供が無理な正座をして我慢している姿が愛らしく目に浮かぶ 松前邦広(千葉県) など

20 祖父よりも赤子が先の初湯かな

長峰正晴(千葉県)

・時代の流れを感じほほえましく感じました 堅田秀子(東京都)・新しい

命、祖父と孫の命の連鎖と初湯。うらやましい 濱崎祥子(鹿児島県)・ご家族の和やかな雰囲気伝わってきます 山崎鶴恵(鹿児島県) など

47 譲られし後は譲りて雪小径

小林七重(新潟県)

・雪国の温もりが生んだ情緒ある作品 有坂馨園(福島県)・一読情景がよくわかる句です。やさしい作者のお人柄がよくわかります 宮宅芳子(岡山県)・雪国の見慣れたけれどとても心温まる光景が好きです 若月理依子(新潟県) など

17 曖昧な別れに残る寒さかな

川嶋法子(東京都)

・誰にでもあるいろんな別れ：身体の中も寒々とした風が吹き抜けるようなそれが「曖昧な別れ」と微妙な気持ちです 杉江典子(岩手県)・きつぱりした別れなら後くされないだろうが尾を引いているのがいらしい 阿部幸子(宮城県)・細い径だと本当にその通りです 金子よし子(新潟県) など

◎短歌部門大賞

134 施設よりはじめて届く友の文わけな

寒川靖子(香川県)

・初めて施設に入居した親友の不安。「結びのこぼ」が切なく伝わってくる 坂元正憲(東京都)・表現は平明で内容は味わい深い 街より子(埼玉県)・家族と離れて施設に入居。老いの淋しさが伝わってきます 久本に地(岡山県)・作者の心情がわかりま

す。「わけなくさびし」は実にその通り： 岩崎令子(大阪府) など

127 句と歌の入選目標達成すあとは百

歳あと二十年 黒澤正行(福島県)

・欲ばり人生も必要かも!!余命20年はご立派です!! 北野耕兵(千葉県) など

◎川柳部門大賞

139 七十年戦死者の無き国なれど祀る人

無き兵の墓あり久本にい地(岡山県)

・七十年の平和続き戦死者のこと忘れがち、世の中きなくさくなりました 津田忠彦(岡山県)・必ず通る散歩道手を合わせてありがとう 佐伯セツ子(香川県) など

◎川柳部門大賞

163 加齢ですこれが病名なんだって

山口千鶴子(東京都)

・医者に有る状況、良くわかる 内河邦久(東京都)・私、何度もそう言われました。私も医者になれるのではと思いましたが 阿部澄江(宮城県)・受診して、返ってくる言葉は、ほほ「きまり」。なんだって、と、とほげがいいです 奥那於子(大阪府) など

◎川柳部門大賞

175 給食のパンが見舞いに来てくれる

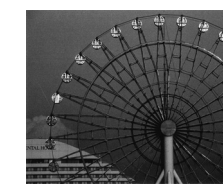
丸山芳夫(東京都)

・風邪で学校休んだか、給食のパンをもつて「どうしたの：」と見舞いに来てくれた。やさしい友だち、うれしいよ。あしたは学校へ行けるかな 石原岳(群馬県)・お孫さんが学校給食のパンをもつてきてくれるんだ 高柳閑雲(愛知県) など

◎フォトイック部門大賞

209 観覧車だけが知ってる夜の朧

池田岬(埼玉県)



・知っているのは観覧車だけ？夜の朧に甘い思い出を包んで 高崎登喜子(東京都)・観覧車には夢があります。そしてロマンがあります。

189 ひと廻りする間に口説く気忙しさ

木村誠一(神奈川県)

・チャンスを狙った若い頃を思い出した 松田重信(埼玉県)・わくわくして乗ったのです。気忙しさが楽しい 増本和子(大阪府) など

198 あの世界はまだ先のこと冬うらら

二瓶邦枝(埼玉県)

・観覧車そのものを詠んだ句が多い中、この句にはイメージの拡がりを感じます 小林七重(新潟県)・自分も近頃同感できる年令に達してきました。気持が良くわかります 鈴木蝶次(宮城県) など

223 登りつめ恋の告白観覧車

勝田久美(大阪府)

・観覧車でこの句のような想い出あります。ドキドキして乗るのではなかったと後悔しましたがその人はもうあの世です 井原毬子(東京都)・ゆるやかで大きな観覧車のスケールと告白の瞬間にドキッと 安部哲(新潟県) など

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました!その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

前回のアンケート

Q 遠足の思い出を
教えてください。

※紙幅の関係上、すべての
お答えを掲載できません。
んことをお詫び申し上げます。



★海

- ・汐干狩り 高柳閑雲(愛知県)
- ・海なし県でしたので江の島は印象に残りました 五味田幸夫(栃木県)
- ・初めての海。広いこと、水が塩からいこと生物がいること等々新発見おどろき 田中昶(鳥取県)
- ・田子の浦に行ったこと。白波をみんなで楽しんだ 小澤円梨(静岡県)
- ・松島!今だ元気な風景です 柳澤京子(宮城県)
- ・浜ナスの実がなっていた浜辺。遠くに北方領土が見えた 早坂絃司(北海道)
- ・初めて海を見る、素足で駆けた砂浜の感触が忘れられない 藤井春三(埼玉県)
- ★山
- ・鷺山へ行った折、樹上から鷺のフンが落ちるのでお弁当を食べる場所を探すのが大変 大久久雅子(埼玉県)
- ・筑波山に大きなゴミ袋をもって参加する子等の遠足。配られたベクトボトルのカラで一杯のゴミ。ナンダコリヤ。 合田浩子(茨城県)

- ・外秩父の登山山へ登り、秩父盆地の景色が今でも眼裏に残っている 大谷茂(埼玉県)
- ・桜島を見て少女時代をすごした。山の上から海迄徒歩の遠足 大窪美代子(大阪府)
- ・東京在住で多摩川園とか高尾山 中田文子(大阪府)
- ・中国山地の高原。始めていた山菜のぜんまい・わらび取りなど楽しんだ 邑橋節夫(兵庫県)
- ・2日間歩き通しの晝登山、感銘深かったが疲れも最高潮 植松與悦(山形県)
- ・12キロはなれた隣村の山に登る楽しみが今も忘れられない 森俊彦(神奈川県)
- ・万葉集に詠まれた三轟山、関東平野を一望する雄大な景 津布久信雄(東京都)

★お弁当

- ・母がむすんでくれたゴマ塩をまぶしたおにぎり 村山徳英(埼玉県)
- ・麦飯にかつおぶしと梅干、土地の子たちは白ごはん。恥ずかしくて一人離れて食べた 中山日出子(大阪府)
- ・山の上で食べたおにぎりが一個、坂をコロコロと落ちて泣いた 中川義彦(新潟県)
- ・白いごはんと玉子焼きで大感激 井上氣海(広島県)
- ・玉子は貴重品。遠足と運動会るときは母が用意してくれた 橋本世紀男(東京都)

- ・ふかし芋をアルミの弁当箱に入れ、伯父の軍服を仕立替えて小学生用として着て近くの山に登った 浦橋克行(兵庫県)
- ・初めて引率した緊張感からか弁当をバスに忘れて下車。児童からすこしずつ貰った 久本にい地(岡山県)
- ・食糧のない時代、梅干しひとつ入ったおにぎり二個:親が作ってくれた精一杯の味 堅田秀子(東京都)
- ・塩おにぎり焼スルメ旨かった 小泉和明(茨城県)
- ・戦後最初の一年生。新教育制度、食糧難。アルマイトの弁当に麦めし、梅干し 中村康浩(福岡県)
- ・仁丹とにぎりめしだけ。友だちのゆでタマゴがまぶしかった 阿部至(埼玉県)
- ・祖母の作ってくれた大きな味噌おにぎり 小山羊子(新潟県)
- ・母の海苔巻、いなり寿司、そしてりんごと水筒が定番 細川光子(栃木県)
- ・母親が「おむすび」を姉弟五人分作ってくれていました。手を赤くしてました 大鳥居牧子(東京都)
- ・母親手作りのおいなり寿司。それも油揚げうらがえしの中にまぜメシ入り。うまかったなあー 北野耕兵(千葉県)
- ・友達のお弁当の「バナナ」が食べたくて唾を飲んでいた 関本守(新潟県)
- ・いのししのオリの前のベンチで、くさい臭いにお弁当が台無しでした 黒田康子(大阪府)

★おやつ

- ・輪になって食べたおにぎり卵焼き 寺内侘(埼玉県)
- ・母の作った黄味が黒くゆで上がったゆで玉子 沖惇子(大阪府)
- ・サンドイッチとバナナが最高の楽しみでした 阿部澄江(宮城県)
- ★おやつ
- ・おやつはきまってる森永のキャラメル一箱 菅原キイ子(宮城県)
- ・200円以内、駄菓子屋さんで迷いながら選ぶ楽しさ 若月理依子(新潟県)
- ・300円と決められて、チョコ、キャラメル、バナナ等 萬濃その子(神奈川県)
- ・遠足に持っていくたくてよそで頂いたお菓子をとおいた 岡村君枝(茨城県)
- ・行きも帰りも嬉しくて山の神社で棒アイスを買いました 青木日出男(群馬県)
- ・キャラメルとりんご一個買って行くのが嬉しかった 高垣勝代(大阪府)
- ・貧しくて飴玉しか持つていけなかった 木村洋一(新潟県)
- ★先生
- ・「蓋沼」という妖しい、こわい沼があり、担任の白井イソ先生に引率されて山みちを歩いた 鈴木岑夫(千葉県)
- ・足許が小石ですべり、一歩進んで半歩下がり。男性の先生が2・3人のリュックサックを持つてくれた 二瓶邦枝(埼玉県)

A Q U E S T I O N N A I R E

ゆで玉子の黄味ばかり好きな引率の先生を思い出した

堀田寿美子(北海道)

俳句をつくりましようと言われ「茶白山下は黄金の麦畑」と詠んだ句が誉められた
松前邦広(千葉県)
先生の指導でみんなで並びついて行った小学生の頃がなつかしい
小暮昭司(群馬県)

★動物園

「上野動物園」年子の妹と弟がいたので、静岡から祖父が付添に来てくれました
増田公代(東京都)
多摩動物園にて子ザルに手をつかまれひっぱられその力強さに驚いた
宇都木安子(東京都)

保育園の遠足で上野動物園と創立者の賀川豊彦先生宅へバスで行った
田野倉訓郎(東京都)

麒麟、カバ、象さんなどおどろきの連続でした
神一男(静岡県)

★川

徒歩で利根川往復歩きました
道給一恵(埼玉県)
荒川の河原への遠足でバツタを追いかけて夢中になった
岩田信(神奈川県)

★城

小田原城へ。いつもと違って二組一緒に記念写真をとった
天野輝子(東京都)
新田義貞の菩提寺への遠足と金山城として名高い中世の山城が印象に残っています
山田楽山(埼玉県)

★兎狩り

うさぎ狩りに行つてうさぎ汁(豚汁)を食べた
小山恵美子(大阪府)

「兎狩り」5〜6匹は獲れる。放課後部活時、職員室より匂香
福岡悟(東京都)

★お土産

会津若松飯盛山へ。男の子の面白い物は木刀が定番
目黒豊光(福島県)
登呂遺跡 友人とおそろいで、ミミはにわを購入
吉里ひとみ(東京都)

★神社仏閣

法隆寺へ。お寺も仏像も初めてで心はどこかへ飛んでいました
奥那於子(大阪府)

隣村の神社。ただ友達と駆け回った記憶だけあります
川嶋法子(東京都)

★行けなかった

風邪を引いて遠足に行けず家でやつを食べすごしていた
金子よし子(新潟県)
伊勢への遠足。空襲が激しくなり、取りやめになりました
増本和子(大阪府)

遠足の早朝、同級生の家が火事になった。火事の怖さを感じ、気分が悪くなり、家で寝ていた
濱崎祥子(鹿児島県)

★その他

新宿御苑でクラス一かわいい男子とO君と一緒に弁当を食べた
街より子(埼玉県)
戦時中에서도市外の湖畔が林で、片道二、三軒の範囲に限定されていた
高杉杜詩花(北海道)
引率の思い出はさまざまなものがあります。洞爺丸の沈んだ日に宗谷海峡を渡っていました
梶鴻風(北海道)

石巻湾沖の金華山の山頂でしばらく海を眺めていたら周囲に誰もいなくなつて慌てた
浅野信廣(宮城県)

鳥取砂丘にスキー遠足。竹をロウソクで曲げて木の箱をのせてソリにして
油谷博子(兵庫県)

帰り道、水筒の水を分けてくれた小五の学友、初恋の人、二十歳に再会
有坂馨園(福島県)

乗りものに乗れるのが楽しみでした
小石澤英夫(東京都)

雨女の私。毎年雨で大船のフラワーゼンターでした
大橋絵代(千葉県)

父がつくろつてくれた靴、朝起きたら枕元にあつた
池田岬(埼玉県)

帰りのバスの中、クラス全員で歌を唄った
本間進(新潟県)

公園に行くのにわざわざ遠回りをして行った事が理解出来なかった
濱田イサオ(福岡県)

三人位でよそ見して叱られた
五十嵐睦博(新潟県)

戦争中で「鍛錬行軍」と言い疎開先から朝早く目的地まで往復十里ほど歩きました
渡邊碧海(静岡県)

事故で沈んだ宇高連絡船の紫雲丸に前日乗船したこと
近藤薫也(千葉県)

終戦後小学校の修学旅行はトラックに乗って行きました
寒川靖子(香川県)

小学校の頃戦中で防空頭巾を被り遠足も戦争に追われていた
羽根田明(神奈川県)

学校から出発したバスからの景色やワクワク感
有島和子(東京都)

弥彦神社で集合写真を撮ったものの陽がまぶしくてにらんでいる様な顔に
吉田加代子(新潟県)

田畑の道を列をなしてみんなで歌を唱つて遠足に行つた
中村和弘(愛知県)

山登りで松茸を見つけました。しかし進入禁止の農業試験場内だったので。当然カンカンに叱られました
白松一良(千葉県)

鍛錬遠足がありお弁当を食べすぎて気分が悪くなり先生の自転車にのせて頂きました
岡野智恵子(埼玉県)

中学一年の時約20km歩いた。帰途は全員無言
藤沢健二(千葉県)

甲州街道を三十キロ歩き、帰りの電車の中に坐りこんでしまった
中澤寿美(神奈川県)

前日決まって腹痛に。次男が似てしまつてやっぱり腹痛。孫はどうか心配
一瀬正子(埼玉県)

母親が前日に靴を買って来て、当日足に豆が出来、痛かった。ブルーにぶち黒の靴でした
松尾らん(東京都)

魔法瓶を買ってもらつたのはいいが、すぐにガシャガシャに割れて叱られた
和崎治人(山口県)

予備の草履を一足持つて行きました。自作の草履でした
黒岩正子(埼玉県)



the Voice

2月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！

皆様のご感想、はげまし、親身なアドバイスで情報誌「喜怒哀楽」がつけられていきます。

- ・ 菜根譚 昔は日本人の心の底にもあった筈の教え、しんと心に響きます。
- ・ 椋俳句会小雀の会。うらやましい句会。なつかしい名栗の地。石田郷子さんと俳人たちの楽しさがひしひしと…。
- ・ 『句集 楳円銀河』の大句、凜とした生き様がかいま見えた。佐々木さんの俳論をお聞きしたい。
- ・ フォトイックの写真の提供者さんに感謝します。地方色があるのもよいと思います。
- ・ フォトイックへの提出は幾つあるのかわかりませんが、別扱いにし俳句・川柳と分けてほしいと思います。フォトに出すと俳句に出せないのもおかしなものです。
- ・ 心に残った作品欄での各人の感想。人により受取り方が多種多様で勉強になった。
- ・ いまでも心に残っている昔話・民話。亡父母にきかされました。昔を思いだして泣けてきます。
- ・ にいがた文化の記憶館「佐渡の偉人」に乾杯！(ムサビ・タマビの創設者があの人だったとは…)
- ・ 「食楽句楽のすすめ」面白かったです。明日はうぐいす餅買いに行きます！(笑)
- ・ 盛田志保子さんの言う「詰まっている」歌を私も作りたいと思う。
- ・ 喜怒哀楽の黄文字蝶々の乱舞。一度に春がとび込んで来ました。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください。

新潟ぶらり

★新潟市美術館―前川國男



▲1985年に開館、今年で満30歳。旧くは新潟刑務所だった。

木々に囲まれた美術館。オリブグリーンが控えめな印象だが同時に重厚感もある。自然に溶け込みすぎて地味、とまで言われた調和の建築は、前川國男により設計されたもの。前川は各地に「前川建築」をもつ新潟出身の建築家で、国立国会図書館や東京都美術館、東京文化会館、学習院大学などはその一例である。

一九〇五(明治三八)年に生まれた前川は、新潟で幼少期を過ごし、その八〇年後、当美術館の設計をすることになる。父・貫一は信濃川の治水工事(大津分水路の計画)に携わった内務省土木局の技師。前川は父の「お前は家を建てる人にならないかなあ」という幼少期の刷り込みを後年回想している。

東京帝国大学(現東京大学)工学部建築学科を卒業し海外で腕を磨いた前川は、当館の設計にあたり、打ち込みタイルという独自の技法を採用した。風雪や衝撃に強く、美しさと丈夫さを兼ね備えている。館内を彩る多様なタイルや、照明やテーブル、スツールなど細部にも前川の意匠が光る。なかでも当館のためにデザインされたスツールは必見(必座?)。

当館の設計コンペの要件に、向かいの西大畑公園のエリアも一体に設計すること、があった。当公園には、前川が幼少期に親しんだ掘割や柳の景色が再現され、美術館の「海の庭」に繋がる。展示だけでなく、館内からの景色、館外の公園も楽しめるのは、そのように意図されたものだったのだ。

西大畑公園が桜の季節には、子どもたちの歓声と大人たちの談笑が響く。「お前は家をつくる人にならないかなあ」という声も何処かに混じっているかもしれない。(菅真理子)



館内のカフェから西大畑公園の景色がよく見える。2階にある本のラウンジも居心地がよく、長居したい空間。
新潟市中央区西大畑町 5191-9 025-223-1622

にいがた
文化の記憶館
便り(7)

越後人のねばり

秋岡 啓子

昨年1年間「にいがた文化の記憶館便り」を連載させていた中で、「喜怒哀楽」読者様からたくさんのご感想をいただきました。新潟県外からも反応があり、とてもうれしく拝読しました。ありがとうございます。今年も引き続き機会をいただきましたので、よろしく願います。

さて新潟の県民性といえば、「ねばり強さ」「勤勉さ」といったイメージがよく挙げられますが、こうした性格は日本有数の豪雪地帯という厳しい自然環境に培われたものといわれます(新潟県全域が雪国ではないのですが)。今回は、まさにそうした越後人ならではの「ねばり」を生かして前人未到の偉業を成し遂げた先人を紹介します。

◆鈴木牧之(1770~1842年)

雪国の暮らしを紹介した江戸時代のベストセラー『北越雪譜』全7冊を、約40年かけて出版しました。牧之は関東と越後を繋ぐ三国街道の主要な宿場町「塩沢宿」(現南魚沼市)で生まれました。現在でも雪深い地域で、2006年にはひとと冬で18・76mの降雪量を記録しています。

牧之の実家は縮を扱う豪商で、18歳のとき行商で訪れた江戸で冬でも雪がないことに驚き、『北越雪譜』の執筆を始めました。山東京伝、滝沢馬琴などに出版の



▲鈴木牧之

相談をするもなかなか実現せず、1837(天保8)年によくやく初編が発売。ベストセラーになり、続編も出ました。雪国越後の民俗、習慣、伝説、産業など幅広い分野に言及されていて、豊富な挿絵を見ているだけでも楽しめます。現在でも岩波文庫で刊行されているほか、英語、ドイツ語、中国語に翻訳されて世界でも読まれています。

◆諸橋轍次(1883~1982年)

史上最大の漢和辞典『大漢和辞典』全13巻を30年余りかけて編纂しました。今も生家が残り三条市庭月は、冬になると雪に覆われます。戊辰戦争で負傷した長岡藩家老の河井継之助が会津へ逃れる際に通った、「八十里越」と呼ばれる険しい山道の新潟側の起点です。



▲諸橋轍次

『大漢和辞典』は5万354字、熟語・成句52万6000語を収録しています。これは漢字の母国・中国の『康熙字典』の収録文字4万9000字を超える壮大な規模で、いかにこの世に自分の知らない文字や言葉があるか、思い知らされます。編纂にあたっては、戦災による資料の焼失、諸橋の失明など幾多の苦難がありました。不屈の精神と多くの協力者によって成し遂げられました。諸橋は1965(昭和40)年に文化勲章を受章しました。

他に、独学で『大日本地名辞書』を執筆した吉田東伍(阿賀野市出身)や、日本で初めてトルストイ全集を完訳した原久一郎(同出身)などがあります。

【企画展示情報】

「越後人のねばり
～鈴木牧之・吉田東伍・諸橋轍次・原久一郎～」

- 会 期:4月29日(金・祝)～7月3日(日)
- 休館日:月曜(ただし5月2日は開館)、4月19日(火)～28日(木)、5月6日(金)
- ※ 6月5日(日)に関連イベントあり。お問い合わせは 025(250)7171。



▲原久一郎



▲吉田東伍

「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田桂さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ人生のセカンドステージを満喫されています。食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

土筆の哀しみ

岩田 桂

おたまじゃくしは蛙の子、つくしんぼうは杉菜の子。この歌は七五調におさまる童歌のリズム感で心がウキウキしてきます。その土筆がいよいよ、土手のあちらこちらから頭を出し始めました。

この土筆クンは線路わきの土手や堤防を住み家にしていきます。大体は一本見つけると、その近くには土筆軍団が陣を張っています。「ここにも、あそこにも、あつた、あつた」そんな声を出して我先にと競争して取りまわります。こうなると大人も子供も無口のまま地面を這いずりまわります。

この場合、土筆眼という特技を持つ人が競争に勝ちます。土筆の居場所を探し出す眼力を土筆眼と言います。ボクの母はその眼力の達人でした。そして小一時間で「もう、これくらいにしておくか」と土筆の束を自慢げに手でかざします。

土筆摘む母無口なりまじめなり

とつてきた土筆は縁側に敷いた新聞紙の上に積み上げて、一本一本袴を剥がします。これが女、子ども総出の大変な作業となります。子どもたちは小さかったから、すぐに飽いてしまつて戦力にならない。結局、祖母や母、あるいは叔母たちがみんな袴をとりまわります。

取り終えると手先が真っ黒になり、水で洗ってもなかなか落ちません。だから爪化粧している乙女たちには、嫌われたりします。

それにしても土筆を「つくし」と呼ばせる、漢字の知恵は見上げたものです。土から頭をもたげた筆

という捉え方である。念のために土筆の頭に墨をつけて、筆の替わりにしてみました。

黄色い花粉が邪魔して墨のノリは良くはないが、確かにカスレた文字くらいは書けます。つくしんぼうでラブレターなど書くと、結構イケそうです。願いが叶うとも言います(まさか)。

その土筆を料理して食べることにします。まず土筆は袴を取つて、裸にして、しっかりと水洗いします。あとはごま油をフライパンに熱し、強火で一気に炒めます。火を弱めて醤油、酒、最後は玉子でとじれば、春の恵みに変身します。

土筆への思ひ一氣に炒めけり

ひとつまみを口に放り込むと、独特の苦味がプワァーと舌の上で広がります。「どうや〜つくしんぼうの団体演技の味は!」と、体操演技の審判団が声をかけてくるようです。これは熱燗の肴や、炊き立てのご飯に持つてこいでです。

土筆はさらに細かく刻んで、薄口のダシで炊き込んだ「土筆ご飯」もまた旬の味です。隣近所におすそ分けしたくなります。「今年の土筆はどうも不景気風に吹かれて、そわそわしている感じね!」などとコメントを付けてお配りする訳です。

おぉ! そうだ! もしかしたら「土筆釜飯」があつてもいいと思うのだが。

まだ誰も気付いていないぞ! やれやれまた商売の話か。

ただし土筆を食べるのは、どうも日本人くらのようです。

中韓アジア系や欧州の人々に言わせると、あれは食材ではない。

それを重宝する日本人は理解できないらしい。まさに土筆民族だと陰口をたたかれても仕方がない。

そういえばそんな気もするが、まあ、いいか、美味しければそれでいいのだから。



弁当の菜は煮込みの土筆なる

それにしても春の生命はどうして皆、ほろ苦いのでしよう。土筆や露の董にしても、タラの芽にしても初恋の思い出にしてもやはりほろ苦い。

苦い酵素を出して、動物から身を守ろうとする若芽若草界の防衛策なのでしょう。やはりその辺は「苦味若草協会」に、問い合わせなければ分かりません。

さてボクらには、どうしても忘れられない土筆に関わる思い出があります。

その一番手は、ママゴト遊びの郷愁です。ママゴト遊びは、莫塵一枚が楽しい我が家となります。今の我が家と変わらないか(笑)。

玄関が必ずあり、そこから出入りすると、未来自母さんが「お父さん! 玄関はあちらよ! 靴を揃えて!」と莫塵の奥から声をかけます。

莫塵の上の小さな箱台には、タンポポの花が牛乳瓶に活けてあります。もちろんご馳走は「土筆、たんぽぽ、椿の花」などが卓に置かれてあります。別にそれを食べるわけではないが、一応はお母さんが椿の葉にのせて未来のおとうさんに差出します。

照れくさそうなお父さんは、正座してそれを食べるふりをします。その光景は一定の品格を保っていました。不思議な国の春のままごと遊び劇場で感じです。この無邪気さがとても好い。

ままごとと菜とつて土筆かな

そしてその風景を遠くから、隠れ見る男の子もいたりします。お招きを受けられない哀れな男の子です。ギクツ!... 彼にとつての土筆は、人生で味わう初めてのほろ苦さの経験なのです。

そうか、土筆が苦いのはその辺にあるのか。叶わなかつたままごと遊びの、みたいな哀しみがあつたのか。その土筆の花粉が風に舞う頃、日本にも遅き春がやってきました。

『詩集 青空の軌跡』 の一節が組曲に!

以前、当社から『詩集 青空の軌跡』を出版くださった高田一葉さん(新潟市在住・新潟県現代詩人会会員)。ある日、詩の一つに曲をつけ演奏したいという連絡が作曲家の方から当社にあり、去る3月13日(日)、さいたま芸術劇場においてその演奏会が開催されました。

《地球を一晩借り切りで》という高田さんの詩が、指揮者の二階堂孝さん、作曲家の鹿野草平さん、そしてキララ合唱団によって「無伴奏混成合唱組曲《地球を一晩借り切りで》」として新しい命を吹き込まれたの演奏会。一つの言葉が誰かの心をゆさぶり、何かを想起、喚起、融合させ、伝えたいという想いが新たな作品を生み出してゆく。言葉や想いを本として残していく、その結果からの拡がり。一端を担ったことを、うれしく感じた出来事でした。



第1回復興いわき 海の俳句全国大会を開催

7月18日、「第1回復興いわき海の俳句全国大会」が、いわき市のアクアマリンふくしまで開催されます。俳句を通して、海の文化継承と復興を祈願する目的で初開催。当日は各賞の表彰のほか、俳人協会の茨木和生常務理事が「暮しと季語」の演題で講演予定です。

【募集要項】

俳句2句：海に関する俳句1句／自由句1句

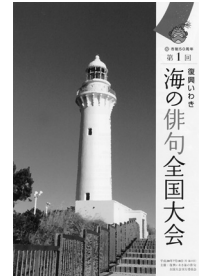
募集期間：平成28年3月1日～5月10日

投句料：1000円(2句1組)

締切：5月10日

選者：稲畑廣太郎、權未知子、鈴木正治、棚山波朗、古市枯声、宮坂静生、結城良一

俳句と投句料：定額小為替または現金書留は下記まで送付
応募先：〒970-8017 いわき市石森1-11-1 古市文子宛
問い合わせは：山崎祐子代表 090-9834-9425



第7回良寛・国上寺全国俳句大会

来たる9月22日(木・祝)、良寛さまゆかりの国上寺・五合庵で開かれる「第7回良寛・国上寺全国俳句大会」のチラシ兼投句用紙を同封しました。賞や様々な特典もありますので、ふるってご投稿ください。

オリジナルポストカード 「春」好評発売中!

花の季節の春。作品も一新した春バージョンも好評発売中です!今回同封したハガキはクサイチゴ。春から初夏へ、季節のお便りにぜひご活用ください。



スタッフの一言

Q. 遠足の思い出を教えてください。

※古き良き時代の遊び道具、紙風船で楽しくパチリ!!

木戸 敦子



新潟遊園への芋掘り遠足の朝。今見ればシックないジャンパースカートだが、当時はこんな滋味なのはいやだ!と玄関先でかなりむくれて写っている。もっとハイに行きたかったのに。次の年の写真は帽子もスカートも赤!

古川 久美子



遠足の思い出……他のみんなが持つような、目覚ましいドラマティックなものが思い当たらない……。楽しかったような気がする、とか、何が好きだったらしい、とかそんな。ぼんやり生きていてすみません(汗)。

菅 真理子



母が入院し祖母が私の面倒をみてくれた時期があった。遠足の朝。慣れない炊飯器だったためろうご飯が炊けていなかった。まじいことになったと思ったが、祖母はお隣にご飯をもらいに行き、お弁当をこらえてくれたのだった。

山田 千秋



小学2年生の遠足で河川敷に行ったとき、記念にきれいな石を持って帰りましょと先生に言われ、どれを見てきれいな石だったのでリュックがパンパンに。家に帰って泣いた私をみて母親もびっくり!5キロもあったそう。

木伏 美恵



新潟市にある郷土資料館へ。萬代橋の昔の姿にびっくり。初代の木造で782mのながーい橋にびっくりした。今でも萬代橋を歩くときは、昔はここからここまでが橋だったのか…と感じながら歩く。

上村 真智子



毎年秋になると、白山公園へ写生遠足に行くのが定番だった。ぐるぐるさっさと松を終1本描き、写生は10分を完了。後は遊ぶだけ。県民会館の方まで行っちゃって先生が探しに来たっけ。

金子 ゆり子



若くて亡くなった母のおにぎりは特大だった。遠足や運動会には子どもたちのために作ってくれました。いま当時を思い出すと大きかったけど、それが当たり前だと思ってべろりと食べていました。「有り難うございました!」いまお礼が言いたい。

石山 由希子



乗り物酔いがひどかったなあ～。でも友達と近所のスーパーにおやつを買いに行ったことがとっても楽しかったのを憶えています。小3の時、リュックの底でバナナが静かに潰れていてとても悲しかったです。

吉田 瞳



明日は遠足だ～と舞い上がった私。翌日なんと発熱で遠足へは行けず…(涙)お弁当持ってリュック担いでどこへ遠足へ出掛けた。実家の会社へ出掛けましたよ。悔しいから社内で仕事する事務員さんの横でシート広げて一人お弁当食べたとき。

4月から保育園年中さん4歳7ヶ月。スカート履いて髪結わいて女の子のはずが兄に負けず劣らず口が達者で男勝りです。





三月のこと

盛田志保子

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり

岡本かの子

三月です。二月の末ごろから、どうも寒さに張りがなくなつたなあ、真冬に笑われるような寒さだなあ、などどうすうす感じてはいたのですが、やはり春の足音は確実に近くまで来ているようです。それでもこの時季にはこの時季の、じーんと芯に届いてくるような冷たさがあります。体を変に冷やすと重い風邪をひいたりします。

東日本大震災のあつた三月十一日の午後、東北地方はとても寒かつたと聞きます。わたしは現在東京で暮らしていますが、生まれ育つたのは岩手県の宮古市ですので、あの日のことは忘れられません。テレビ画面ではリアルタイムで、みるみるなつかしい建物や景色が壊されていきました。

何日か両親とは連絡がつかず、悪い考えばかりが浮かんできて眠れませんでした。わたしはしばらく、ばかみたいに、自分のこと、つまりは自分の両親の安否のことしか考えられませんでした。残酷な言い方かもしれませんが、人は地球上で何万人が死んでも、自分の大切な人が生きてさえいてくれたらそれでいいのです。だから、その願いがかなわなかった人が本当に大勢いるということを、今も思うのです。

そういえばあの時、わたしは何度も同じく故郷を離れて暮

あの日から5年余。災害の恐ろしさとともに感じた、日常の生活の有り難さ。あたりまえではない今この時、この命を忘れずにいなければ。そう思い出させてくれた盛田さん、ありがとうございます。

らす妹に電話をかけました。ところが、妹はなにを訴えかけても、「ふーん。」や「：。」や「大丈夫じゃない？」くらいしか返事をしません。最後は「じゃ。」とあつさり電話を切つてしまいます。わたしはなんだか、あれ？というような気がしました。かみあわないと、あきらめる。かみあつたら、ふくれあがる。心配や不安というもの。わたしには薬のようなものだったのです。妹は。

その後、両親は無事でいることがわかり、わたしはすぐにかかけつけることはできませんでしたが、妹は豚の角煮をたくさん作つて向こうへ持つて行きました。駅に降りたつとすぐに海の匂いだったといいます。津波に一晚沈んだ十円玉は深く傷つき、どうやっても汚れが落ちなかつたそうです。

あれから五年が経ち、あの日一歳だった下の息子は春から一年生です。出会いや別れは強引な津波の力のように、わたしたちを思いもよらない場所に運んでいきます。

地元には昔から、「津波でんでんこ」という言葉があります。津波のときは家族ばらばらでも、まずは自分のことだけを考えて、それぞれが高い場所へ逃げろ、という教えです。母は遠く離れて暮らすわたしたちに、「津波じゃなくても命はてんでんこ。」と言いました。命はまず、それぞれがせいじつばい大事にして生かすべき、それぞれのもの。そして「命でんでんこ」というとき、それぞれに燃えながら向かい合う命と命の瞬間を歌つた巻頭の一首を、わたしはいつも思い出します。

編集後記

年が明けたと思つたばかりなのにもう新年度4月。正月、節句、卒業、入学…等々、人生に節目はつきもの。物事の始めと終わりと。家庭では「おはよう、おやすみ」「いってきます、おかえり」「いただきます、ごちそうさま」。職場では朝礼や終礼、週、月のミーティング等。一つ一つを終え、けじめをつけて明日に、次に進んでいくという意味なのでしょう。それは毎日の些事から人生の出会いと別れ、生老病死まで。けじめのない日常を送っているようでも、意識していなくとも確実に。終われば始まる。4月。誰にでも、いくつになってもスタートは目の前に。(木戸敦子)

2016.4-5. vol.85 (2016年4月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション